

かしはら



かしはら
第172号
平成30年
紀元2678年

- ・国際政治と宗教
- ・橿原神宮旧拜殿と宮大工 西岡常一
- ・澄心会展／特別展「伊勢神宮の御神宝と橿原神宮の刀剣」
- ・父の思い出
- ・今後の祭典・行事

ご挨拶

先ず以て皇室の弥栄をお祈り申し上げます。
皆様方には平素より橿原神宮の諸祭事につきまして格別なる御篤志をお寄せ頂いておりますこと、誠に有り難く御礼申し上げます。

扨本年、平成三十年は明治維新より百五十年という節目の年にあたります。明治時代は急速に近代国家の礎を築き上げた時代で御座いました。西洋から多くの文化、文明が流入してくる激動の中で明治に生きた人々は王政復古の大号令に『諸事神武創業乃始二原キ』とあるように建国の祖、第一代神武天皇から始まる皇室を仰ぐことで、日本国として二つに纏まって参りました。

このようにして明治時代は皇室を中心として日本人の精神、歴史、文化を再認識した時代であつたのではなからうかと拝察致します。

二年後は、養老四年日本の正史として編纂された『日本書紀』成立より千三百年の節目の年でも御座います。そしてその年には、五十六年ぶりに東京でオリンピックが行われ、世界中が日本に注目する年でもあります。森鴎外の著作にもありますように、明治期は『普請中』であつた百五十年前の日本は、その後の開化と幾多の困難を耐え忍び、度重なる復興を経て、有難くも現今の平和と繁栄を享受するに至るまでに成りました。それは当時の人々が世界と肩を並べるため、個々の心に国柄を宿していたのではなからうかと存じます。

世は益々の混迷の時代を迎え、亦生み出される混迷の火種は消されるところが増えるに任せるに至っております。神武天皇が「八紘を掩ひて宇と為む」の大精神で肇められた我が国を、明治の御代に此の精神を守りつつも近代文明を受け入れたことに、此の混迷の時代でありながらも日本が日本で在り続けていられるという、先人達より受け継ぎし勁い意志のようなものを感じざるを得ません。

本年の明治百五十年を迎えるにあたり、未だ察するに及ばずながら、多くの先人達の智慧と精神そして祈りを改めて深く推し測り、未来への糧とする一つの節目でもあるように思っています。そして二年後は、平和を愛する日本の素晴らしさを世界に伝える為、我が国にとって、また世界にとつての精神的な飛躍となりますよう祈念して止みません。

奇しくも二年後の大輪には、此の明治の御親政に創建致しました橿原神宮では御鎮座百三十年を迎えます。これにあたり、神武天皇の御聖業と明治天皇の御親政に思いを致し、皆様と共に奉祝の華を添えたく、この式年祭に向けて赤誠を尽くすため、鋭意準備を進めております。

末筆ながら皆様の御多幸と御隆昌を心よりお祈り申し上げます、御挨拶とさせていただきます。

橿原神宮宮司 久保田昌孝





同志社大学法学部教授 村田 晃嗣

二〇一七年十一月に、アメリカのドナルド・トランプ大統領がイスラエルの米大使館をテルアビブからエルサレムに移転すると発表し、国際的な反発を招いている。エルサレムはユダヤ教とキリスト教、イスラム教にとって共に聖地だからである。また、ミャンマーでは、イスラム教徒中心のロヒンギャが深刻な迫害にあつて、五十万人もが難民となつている。言うまでもなく、ミャンマーは仏教国である。一神教は狭量で排他的だが、多神教は寛大で多様性を認めるといった二分論がいかにか安直かを示している。いずれも、宗教が国際政治に大きな影響を与える事例である。

世俗の政治権力と宗教的権威を分離する―この政教分離こそが、西洋的な意味での近代化の大前提であつた。宗教改革以来、西洋は多くの迫害と流血を経て、これを実現してきた。ところが、近代化の果てに一九七〇年代から、宗教が再び国際政治に復権を果たした。アメリカではジミー・カーターという南部バプティストの「ボーン・アゲイン」(成人後に神との出会いを再認識し生まれ変わったと信じる人々)の大統領が登場し、草の根ではキリスト教原理主義が台頭した。社会規範の動揺やフリー・セックス、麻薬乱用、とりわけ、人工中絶に、彼らは我慢できなくなつたのである。カーターが挫折すると、彼らは共和党右派と結び気を強めた。また七七年には、イスラエルで労働党が初めて総選挙で敗れて、よりシオニズム色の強いリクードが政権を担つた。七八年には、ポーランド出身のヨハネ・パウロ二世がローマ法皇に就任した。四百五十五年ぶりにイタリア人以外の法皇が、しかも、史上初めてのスラブ系の法皇が誕生したのである。のちに法皇は、社会主義体制下の祖国ポーランドの自主管理労働組合「連帯」を勇気付ける。ふり返れば、これがソ連崩壊の序幕となつた。さらに七九年には、イランでホメイニ師によるイスラム革命が起こる。この結果、テヘランの米大使館が四百四十四日にわたつて占拠され、カーター大統領の再選を阻んだ。フランスの宗教学者のジル・ケペルは、

これらの現象を「宗教の復讐」と呼んだ。

さらに、一九九一年末にソ連が崩壊すると、冷戦は終わり、イデオロギー対立の時代も終焉した。これに前後して、アメリカの二人の政治学者、フランシス・フクヤマとサミュエル・ハンチントンはそれぞれ、「歴史の終わり」(一九八九年)と「文明の衝突」(一九九三年)を論じた。フクヤマによると、共産主義の終焉で「西側の自由民主主義が人類の政治の最終形態」となり、思想対立としての「歴史は終わった」のである。それに対して、ハンチントンはイデオロギーに代わつて世界の八つの文明が対立を繰り返すと予想した。西洋、ラテンアメリカ、アフリカ、イスラム、中華、インドゥー、ギリシア正教、仏教、そして日本である。両者とも冷戦後の複雑な現実を単純化しすぎていた。歴史は終焉しなかったが、すべての文明が対立を繰り返しているわけでもない。

ただし、宗教が国際政治の最前線により一層進み出たことはまちがいない。そのこともあつて、国際政治ではソフトパワーやパブリック・ディプロマシーについて語られることが多くなつた。ソフトパワーとは、赤裸々な実力の行使、つまり強制(ハードパワー)に対して、他者から自発的に同調や協力を引き出す魅力のことである。パブリック・ディプロマシーとは、他国の政府ではなく社会や一般大衆に働きかける外交であり、その際に規範や価値、文化が重視される。二〇〇一年九月十一日の同時多発テロとその後のアフガニスタン、イラクでのアメリカによる大規模軍事行動、中東情勢の一層の混乱、国際的テロの拡散などから、こうした手法に注目が集まるようになったのである。

また、国際政治学の分野でも、コンストラクティビズム(社会構成主義)という見方が有力になつてきた。従来のリアリズムは国際政治を主として国家間の力による対立の観点から分析し、リベラリズムは国家およびその他のアクター間の利益による相互依存の観点から考察してきた。これらに対して、コンストラクティビズムは、力や利益は所与のものとしてあるのではなく、人びとの認識を通じて構成されていくと見る。従つて、人々の認識に影響を与える文化や価値、規範、そし

て宗教が重要になってくる。つまり、例えば、先進国のキリスト教徒と発展途上のイスラム教徒では、国際政治における力や利益、正当性についての認識が異なるだろうというのである。

二〇一六年のトランプ氏のアメリカ大統領選挙での勝利は、世界の多くの人々を驚かせた。これには様々な複合的な要因が働いているが、やはり宗教的な観点を無視できない。例えば、アメリカでは総人口に占める白人の割合が六十二％でラティーノのそれが十七％だが、二〇五〇年にはこれが四十六％と二十六％になると予想されている。つまり、今世紀の半ばには、アメリカ人の四人に一人がラテン系になる。現在、アメリカのキリスト教人口でプロテスタントカトリックの比率は三対一だが、ラティーノ人口の増大でカトリックの比重が増えそう。また、プロテスタント、カトリックを問わず、福音派(エバンジェリカル)の割合が増すと見られる。福音派とは、ポーン・アゲインで聖書を字義通り解釈する人びとである。人工中絶や同性婚などのモラル・イシューで、福音派は民主党リベラルと対立する。さらに、アメリカにおけるイスラム人口も増大していく。統計上は三百三十万人、不法移民を加えると七百一八百万人ともいわれるイスラム人口は、今世紀半ばまでに倍増する。これはアメリカに限らず、やはり今世紀半ばには、世界全体でプロテスタントとカトリックを合わせたキリスト教人口をイスラム人口が凌駕するであろう。つまり、イスラム教が世界最大の人口を擁する宗教になろうとしているのである。宗教から見たアメリカと世界の人口動態は、大きく変容しようとしている。

二十一世紀に入つて、日本でもグローバル化という言葉が多用されるようになってきた。しかし、この概念に対するわれわれ日本人の理解は、おそろしく浅薄ではなからうか。実際、多くの人々がグローバル化と国際化の相違さ意識していない。両者が同じなら、異なる表現を用いる理由はないはずなのである。

海外に留学する学生が増える、海外の企業との取引が増える、英語のスコアが上がる、大学の世界ランキングが上がる―これらはグローバル化と無縁ではない

が、表層的な現象にすぎない。本稿では宗教と国際政治について論じてきたが、例えば、やがて世界最大の宗教となるイスラム教のシーア派とスンニ派の相違について、簡潔に説明できる日本人がどれほどいるか。われわれがどのような宗教を信じるのか、あるいは、宗教そのものを信じないのかは、まったく個人の信教の自由である。しかし、かりにわれわれが宗教に無関心でも、国境を一步踏み出せば、宗教を命がけて信じている人々が大勢いる。何も中東にまで足をのびさなくても、東南アジアは巨大なイスラム人口を擁している。また、われわれが国内にとどまっても、多様な宗教的背景を持つ人びとが国境を越えてやって来る。古来、多くの宗教は海を越えてこの島国にやって来たのである。これがグローバル化である。相手の宗教について、きわめて基本的なことに無知であることが、多くの摩擦や場合によっては紛争を引き起こす可能性さえあるのである。

筆者の属する大学業界は、近年のグローバル化には熱心だが、そこでの宗教の意義や役割について、かなり鈍感なのではないかと危惧する。高等教育の現場でも、宗教と政治や宗教と経済、宗教と文化、宗教と科学といった問題を多角的に論じ学ぶ機会を増やしていかなければならない。それこそ、日本にとつてのグローバル化の最重要課題であらう。

プロフィール

村田 晃嗣(同志社大学法学部教授)

一九六四年、兵庫県神戸市に生まれる。

八七年、同志社大学法学部卒業。

九〇五年、米国ジョージ・ワシントン大学留学。

九五年、神戸大学大学院法学研究科博士課程「国際関係論」修了。

神戸大学博士(政治学)。

九六年、「変容する日米安保政策コミュニティ」で読売論壇新人賞優秀賞受賞。

広島大学総合科学部助教授、同志社大学法学部助教授を経て、二〇〇五年

より同志社大学法学部教授。

専攻はアメリカ外交史・安全保障政策論。

著書に『大統領の挫折―カーター政権の在韓米軍撤退政策』(有斐閣、

一九九八年、アメリカ学会清水博賞・サントリー学芸賞受賞)

『戦後日本外交史』(共著、有斐閣、一九九九年、吉田茂賞受賞)など

南神門を通ると目の前に広がる広大な敷地と畝傍山を背景にして建つ外拝殿。そして、外拝殿の横に静かに建つ土間殿。今回は土間殿とその建築を手掛け、後に世界最古の木造建築法隆寺五重塔をはじめ、多くの国宝や重要文化財の解体修理を手掛け、その後、薬師寺再建に人生を捧げた宮大工西岡常一について記すこととする。

◎ 昭和初期の新拝殿

昭和四年、創建当初より使用してきた拝殿(旧神嘉殿、現在の神楽殿)では、祭典の規模が大きくなるにつれ、不都合が多く出てくるようになってきた。拝殿は檀原神宮創建時に明治天皇の思召しにより本殿(旧内侍所)と共に京都御所から移築された経緯を持つ。その建物の性質上、模様替え等も行うことが出来ない。その為、解体をせず移築し、檜皮葺を替え、直会殿として使用することで管理保存を行う事がこの年に決まった。そして、新しい拝殿の新築工事は昭和五年十月に起工し、翌六年十月に竣工する。この新拝殿が後の土間殿である。

◎ 西岡常一の略歴

西岡常一は法隆寺棟梁西岡常吉の嫡孫として父植光、母つぎのあいだに生まれた。幼少期より祖父である常吉に棟梁となるための教育を受けて育てられた。

当時は戦時中であったため招集と免除を繰り返しながら法隆寺の解体修理を行なった。

戦後、五重塔や金堂の解体修理等を経験し、その経験を買われて薬師寺再建のために棟梁として招かれる。薬師寺では棟梁として金堂復元、西塔復元、玄奘三蔵院伽藍建立等に携わり薬師寺再建に力を注いだ。そして、宮大工として初めて文化功労者に選ばれる。

◎ 西岡にとつての初仕事

昭和六年、西岡にとつて棟梁として初めて造営した建造物こそが檀原神宮拝殿(現在の土間殿)である。事の経緯は父植光が拝殿新築の名義人となっていたが、取りかかっている法隆寺が忙しく手が回らず、父に代理棟梁を命じられたのである。

拝殿の建築は弟を含め六人で手がけたこと。作業着はすべて白で統一されたこと。巫女に話しかけたりしないこと。白木であり、手垢がついてはならないため最初から最後まで手袋をはめて仕事をしたこと。役所からは建築についてではなく、作業に関する注文が多かったと当時の様子を述懐している。また、檀原神宮拝殿造営は設計を専門の技師が行い、組み立てるだけであった。しかし、途中で調整し設計以上のものに仕上げたとも述べている。

戦後、西岡は樹齢千年を超える台湾檜を使用するが、その台湾檜を使ったのはこの檀原神宮拝殿造営が初めてである。

◎ 西岡の檜に対する考え、思い

西岡は木の扱いについて日本書紀の記述から、神代より木の使い方は決まっていると指摘している。日本書紀によると「杉と樟、この二つの木は船を作るのによい。檜は宮を作る木によい。檜は現世の国民の寝棺を作るのによい。」とあり、目的によつて使用する木材が記されている。材質が緻密で、粘りがあり、湿気に強く、害虫が無く総じて耐久力を持つものは檜が一番であることを神代の時代を継承した古代の人は知っていたと言っているのである。

檜は日本の風土に合っており、そのため日本の周辺にしか生育していない。自然林の北限は福島県であり、南限は台湾の阿里山である。この阿里山の檜は、紀元二千六百年の記念事業として檀原神宮社殿拡張工事の材として使用された。

檜が一番良いところは樹齢に比例して耐用年数が長いということである。法隆寺の伽藍の材料は檜であるがだいたい千年か千三百年くらいで伐採されて材料になっている。台湾に行くと樹齢二千六百年、千四百年というものもある。法隆寺の伽藍が今まで千三百年たつていることを考えても耐用年数がこんなにも長いのは檜以外にない。残念ながらこのように樹齢の長い檜は日本にはもう残っていない。

木は動けないから雨や風や雪にもじつと我慢して我慢強い木が勝ち残る。それだけではなく、深いところにある地下水を目指し、硬い土壌に根を張らなければいけない。千年以上経った木は厳しい環境に耐えて競争に勝ち抜いた木である。だから木は育った環境によつて癖が出てくる。その木の癖を理解し、組み合わせて堂塔木組みをしなければならぬ。

「堂塔の木組みは木の癖組、木の癖組は工人等の心組、

工人等の心組は匠長が工人等への思いやり」

西岡が生涯守り続けた法隆寺宮大工に伝わる口伝の一つである。

昭和六年に西岡が建築した檀原神宮拝殿はその後、昭和十五年紀元二千六百年を迎えるにあたり新たな御社殿が造営されることとなり、拝殿については祭典や参拝の便宜を考慮した内外両拝殿の制が採用されたことによつて、一時仮移転の上更に昭和十五年三月一日から五月十一日までの工事期間をもつて現在の外拝殿東北方に移築され、土間殿と称することとなる。現在は各種奉納行事などに使われている。

参考文献

- 西岡常一著『宮大工棟梁・西岡常一「口伝」の重み』(平成二十年) 日本経済新聞出版社
- 西岡常一著『木に学ぶ―法隆寺・薬師寺の美―』(平成十五年) 株式会社小学館
- 檀原神宮『檀原神宮史巻二』(昭和五十六年)

澄心会展

檀原神宮では初の試みである「澄心会」の展覧会が、関西文化の日である十月十八日(土)・十九日(日)の二日間に亘り開催されました。

現在、檀原神宮の職員が毎月修養に励んでいる書道・茶道・華道の各教室を総称して「澄心会」と呼びます。この会では、月に数回、修練を積むことを通して精神の鍛錬を図ることを目的としています。

展覧会場は、昭和四十二年重要文化財に指定を受けた文華殿。会場では、本展の為に制作した「書」と「いけばな」の作品に併せて、師範の作品も同時に展示致しました。

「澄心会」で教鞭を執って下さる先生方は、書道部・奈良県書道教育研究会・土家利之氏、茶道部・裏千家岩井宗浩氏、華道部・嵯峨御流境将甫氏の御三方。神道の精神である「浄明正直へきよく、あかるく、たたくしく、なおく」を学ぶため、日本古来の伝統芸能である「書道・茶道・華道」の三道の文化に触れ、日々精進して参りました。

澄心会展の来場者数は約二百五十人。当日は、展覧会と共に文華殿からお庭の景色をご覧頂きながら、ご希望の方々には抹茶と干菓子を楽しんで頂きました。二日間という期間ではありましたが、鮮やかに色づく紅葉の中、「澄心会」初めての展覧会が開催できましたこと、心より感謝申し上げますと共に、この展覧会に当たりご指導ご鞭撻賜りました先生方に深謝申し



(左から) 境氏・岩井氏・土家氏



お庭を背景に抹茶をいただかれている様子

上げます。

また、翌日から文華殿秋季特別公開並びに宝物館特別展を一週間に亘り開催致しました。

特別展「伊勢神宮の御神宝と檀原神宮の刀剣」

十一月二十日(月)から二十六日(日)まで、文化継承のため伊勢の神宮より下附された御神宝と檀原神宮で所蔵する刀剣を宝物館において公開致しました。宝物館は、御鎮座百年(平成十二年)並びに神武天皇の御即位二千六百六十年を記念して建設された崇敬会館内に位置し、開館以来、檀原神宮へ奉納された名品を展示して参りましたが、この度特別展を開催する運びとなりました。

今回展示された御神宝は全部で四点。天照大御神をお祀りする皇大神宮より「梓御弓」一張、皇大神宮の別宮 月読宮より「御楯」一枚、同じく別宮 瀧原宮より「御杵」二竿。最後に、天照大御神の食事を司る豊受大御神をお祀りしている豊受大神宮の別宮 風宮より「御太刀」一柄が下附されました。四点の御神宝は二十年以上の時を経て、天照大御神の五代目にあたる神武天皇をお祀りするこの檀原神宮で、初の公開を迎える事となりました。

重要文化財 文華殿の

秋季特別公開も同期間開催されたこともあり、多くの方に御覧いただく事が出来ましたこと、大変感慨深く感じています。



(左から) 御杵、御楯、御太刀、梓御弓



所蔵する刀剣展示風景

檀原神宮から社報「かしはら」に檀原神宮の第十四代宮司を務めました私の父、長尾薫について、息子の目で見えた父のことを書くようにというご依頼がありました。亡くなって三十年以上たつた父のことは雲の彼方に隠れてしまっておりませんが、思い出すままに書いてみたいと思います。

父は昭和四十六年から昭和五十七年まで檀原神宮宮司を務めました。國學院大學を出て浅間神社や枚岡神社などに奉職した後、伊勢神宮に務めておりましたに兄と私が生まれ、そのあとすぐ昭和十二年に檀原神宮に移りました。これは伊勢神宮の少宮司をしておられた菟田茂丸氏が紀元二千六百年を檀原神宮で国家行事として寿ぐために再び檀原神宮宮司となつて移られたときに、宮司の手足となつて仕事をするようにと「緒に連れてこられたのでした。聞くところでは菟田宮司は非常に立派な方で、神職の仕事だけでなくいろんな仕事をしっかりとこなさる方だったのですが、同時に非常に厳しい方で、父は菟田宮司に鍛えられ、神職としてのあらゆることを学び取つたと言っております。

紀元二千六百年の一連の行事は、社殿の建設から神域の整備、国民挙げての祝祭行事などと多くのことが行われたのですが、無事にすべてのことを成し遂げたあと権宮司になり、翌年福井県の劔神社に宮司として奉職し、そこで終戦を迎えました。

皆さんよくご存じのことですが、戦争に負けて神社はすべて国の組織から切り離され、各神社は一つの宗教法人として独立して経営してゆかねばならないというところに突然放り出されたのです。国民皆が日々食べるものにも事欠くという時代に神社にお賽銭をあげてくれるような人はいらず、私たち一家はまさに路頭に迷うというような生活でした。劔神社の持つていた小さな畑を耕してサツマイモやカボチャを作つたりして飢えをしのいでおりました。

「長い人生の間には大変なことが必ず二度や三度はある。その時どうするかが大事で、そのために神を信じ勉強をするのだ」とか、「まあ、数年もすれば饅頭くらいは食えるようになるだろうよ」と肝のすわつたようなことを父はいつ

ておりましたが、母の着物をお米に換えてもらつたり、ヨモギのおじやヤツマイモのおかゆなどで生活をしていたのでした。両親の苦労は小学校に入りたての私ども兄弟に痛いほどよくわかり、常に空腹のお腹を抱えながら我慢していました。毎夕食後は一日苦勞した両親の肩もみをしてあげることくらいしかできませんでした。

戦後三年ほどして官幣中社だった滋賀県の御上神社に移りました。この神社はほとんどの社殿と楼門が国宝や重要文化財に指定されており、また昭和天皇が即位される時の大嘗祭に使われるお米を作つた悠紀齋田がある由緒のある神社でした。そこでこの齋田で田植えから稲刈り、脱穀まですべてを家中が出てやり、おいしいご飯を頂くことができるようになりました。小学校から大学までずっとこのような田んぼ仕事をやり、農家の仕事のつらさを味わいました。御上神社には戦後すぐには神職が四、五人いたのですが、給料を払うことができず、徐々に減らして最後は父一人で奉仕しておりました。ですから広い境内の掃除と月に何度かあるお祭りの前の日の社殿の拭き掃除といったことは父と我々子ども二人の仕事でした。冬の寒い日の拭き掃除は本当に辛かったのですが、父は「神様のために奉仕しておれば神様はちゃんと見てくださつていて、長い人生の何時かは恩恵を垂れてくださるのだ」と言つて手伝わされました。

父は昭和三十九年にふたたび檀原神宮の権宮司として奉職することになり、それから数年して宮司となりました。その後奈良県神社庁長、本社本庁理事などもしておりましたが、昭和五十七年二月二十二日に現職のままで亡くなりました。まさかといった突然のことで神宮職員の皆さんや関係の方々にご迷惑をおかけしたことを存じます。本人は手術は成功するものと思つて入院したのでしょうか、手術中の麻酔による昏睡状態のまま亡くなつてしまいました。私ども家族にとつても想像もしないことでした。父は家庭ではあまりしゃべらない人で、過去のことや神宮のことなど一切口にしませんでしたが、手術の前日病室に行きましたら珍しく私が小さかった時のことをぼつぼつと話してくれましたが印象に残っております。八十歳近くになると昔のことを懐かしく思い出すようになるのでしょうか。これが最後の言葉となつて

しまいました。享年七十九歳。神社本庁長老の称号を授与されました。

戦争が終わって二、三年たったころは、宗教学人化された神社は大きな神社と言えども護持してゆくことが非常に困難であり、父が務めました。剣神社や御上神社などはいわば息絶え絶えとなっていました。そういう状態だったからかどうかわかりませんが、「時代は変わった。先祖代々神職だったがお前たちは必ずしも神職でなく自分のやりたい道を歩めばよい」と言ってくれましたので、それを良いことにして、兄は京都大学を出て銀行員に、私は京都大学を出て研究者になり最後は大塚大総長になるといふ道歩んでしまいました。しかし年を取るにしたがって、神職の家系だったのにそれを引き継がなかったという自責の念が強くなりましたが如何ともしがたく、せめて毎朝の神棚の前での拝礼だけは欠かさずに行っております。しかし幸いなことに私の娘が普通の大学を出たにもかかわらず神職の資格を取り、檀原神宮に奉職させていただき、現在は宮崎県の小戸神社の神職として務めさせていたにいます。これは父がありがたいことで、神様と先祖に対する唯一の償いでありませう。

父が神前に拝礼するときの拍手は、乾いたそれだけで非常に温かみのある心のもった音で、どんな時も同じ音だったので、私の拍手は、毎朝神棚に拝礼しているのですが、音がよく乱れるのです。これは自分の心にまだまだ迷いがある証拠で恥ずかしいことです。

わが国には八百万の神がましまして、例えば檀原神宮には第一代の神武天皇が祀られており、御上神社の祭神は天御影之命であるといつたように、それぞれの神社には異なった神様が祀られているとか、神社への参拝の仕方など、子供の時にいろんなことを教えてくれました。ですがそれぞれの神社の神様の名前を知っているのはおそらく神職の方々くらいのもので、現代の我々一般人はどの神社に行っても祭神の区別は気にせずに、神様に対して拝んでいるのです。これはきつと日本の神様はすべてイザナギ・イザナミの神様の子孫であるところからくるのでしょう。八百万の神たちはみな同族だからではないでしょうか。しかし、このように八百万の神がおられるということは厳密に言えば日本は多神教の国と言えるのでしょうか。ただ日本における神道という多神教は、世界の多神教、例えばピラミッド時代のエジプトや古代ギリシャ、古代インドなどの多神教とはよほど違っていますし、まして一神教とは全く違います。またこれらのほとんどの地域

で多神教が一神教に代わってしまいました。それはなぜなのか、どうして日本では変わらなかったのか、またそれらの国や地域の宗教形態がそこに住む人たちの民族性とうまく関わっていて、日本人の民族性とうまく違っているのか、といったことに興味を持たざるを得なくなりました。いろいろと考えてきましたが、いまだに納得のゆくところまでいっておりません。父だったらなんとどうだろうかと思ひ巡らすこともよくあります。

父は神に仕えるという意味では非常にまじめな人でした。毎朝起きるなり風呂場で水浴びをして潔斎し、神棚を拜んでから朝食をとるといふ生活をずっと年を取るまでやっておりました。冬の寒い朝など、そんなことをしたら心臓麻痺になるから止めるよう母や私どもが言っても大丈夫と一言で我々の話を傾けようとしないうちで徹なところがありました。大変頑固で一旦白と言ったら実際が黒と気が付いても間違っていたとは言わない人で、母を困らせていましたが、神宮職員の皆さんも苦勞されることがあったのではないかと思っております。父は古い人間でしたので年をとるまで母に対して温かい言葉をかけるのを聞いたことがありませんでした。しかし六十歳を過ぎるころになると少しずつ優しくなってきた、いたわりの言葉をかけるようになりましたので、我々子どもとしてはホッとするようになったのです。心の中では母に感謝していたのでしようが、それを口に出したり行動に示すということができない人だったので、思っています。

父は家庭のことにはまったく無頓着で家の中や庭の掃除をするのは見たことがありませんでした。家ももう少し広いましなところに住めばよいのに、贅沢はしない、日常が適当に過ごせばそれで充分だという人で、勤め先の神社のことばかり考えていたようです。御上神社にいたころには自分で本殿や拝殿、境内の掃除など我々子どもを動員して一生懸命やっておりました。神宮では若い神職の人がヘマをしたり、いい加減なやり方をした時には厳しく叱りつけていたようです。しかし叱った後はケロリとして、怒ったことなどすっかり忘れてしまっただけで、しっかりした仕事をすればほめたり可愛がったりしていたようです。父が亡くなってから神宮の神職の方々にお会いするとよくこのようなことを聞かされましたが、叱られて非常に勉強に

なつたとおつしやるので慰められました。親分肌の人間だったのだらうと想像しております。檀原神宮在職中は社殿の屋根の銅板への葺き替えや神楽殿、神宮会館等々の整備、深田池その他の整備などいろんなことをして、神宮にとつての戦後の最も困難な時期を乗り切つたのではないかと思つております。

「お神酒あがらぬ神はない」とか世間で言うことがあるようですが、父は人とのお付き合いでほんの少しくらいは飲んでいたようですが、家では一切飲んだことがありませんでした。しかし宴席は結構好きだったようで、皆さんといろいろ話をするのを楽しんでいたのでしよう。食べ物ではうなぎが大好きでした。東京に行くと青山のこじんまりしたうなぎ屋さんに必ず行つていたようで、私も一度連れられて食べに行つたことがありました。というわけで今でも父の命日には大きなうなぎのかば焼きを神棚にお供えしております。囲碁も大好きで、暇があればやつておりました。

以上思ひ出す父の姿をとりとめもなく書いてまいりましたが、亡くなる何年前か、確か七十歳代半ばの頃、どういふ心境だったかわかりませんが、父が私に向かつて「世の中には我々神職以上に神を尊崇している人がおられるね」とポツリと申したことがありました。これが妙に耳に残り、神武天皇を心から崇め、神道に人生を捧げてきた人間であるのに、何故そんなことを言つたのかという謎が残つたのでした。

プロフィール 長尾 真

一九三六年、三重県に生まれる。

六年京都大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了後、京都大学工学部助手。六八年助教を経て、七三年教授に就任。九七年京都大学総長。二〇〇七年国立国会図書館長。二〇一六年より京都府大学法人理事長。日本学士院会員。

長年、コンピュータによる画像処理、自然言語の研究を続け、機械翻訳に種々の新しい考え方を導入し、システムの開発も行つた。著書に『わかるとは何か』(岩波新書)・『人工知能と人間』(岩波新書)など。

紫綬褒章、レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ、文化功労者、日本国際賞など受賞歴多数。

今後の祭典・行事

- 四月 二日 御鎮座記念祭
- 三日 神武天皇祭
- 第二日曜日 第十三期甲種飛行予科練習生戦没者慰霊祭
- 下旬 下種奉告祭げしゅ
- 二十九日 昭和祭
- 五月 二日 長山稻荷社例祭
- 五日 有楽流献茶祭
- 十二日 初鮎奉献祭はつあゆ
- 六月 中旬 御田植祭
- 三十日 御本殿以下御社殿清掃
- 夏越大祓なごしおほはらえ
- 七月 一日 夏越神楽祈禱
- 下旬 神楽講習会
- 八月 一日～五日 林間学園
- 九月 九日 献燈祭
- 秋分の日 秋季皇霊祭遙拝

毎月一日・十一日・二十一日は月次祭を斎行。
※御参列を御希望の方はお問い合わせ下さい。